

すずむし

Vol.2 No.9

1952年9月

倉敷昆虫同好会

目的を忘れると

或晩丁が訪れてこんな話をした。未だ若いSさんは瓜を唯一の生活手段として生活していた。百姓の息子であり孫であったSさんは、収穫をよくするためには、稲は如何に育てたら良いかとか、作物の害虫や益虫はどう扱ったら良いかは伝統的によく心得ていた。彼は農学や昆虫学は一向知らないが収穫を上等なわりのよいものにすべく作物を管理することは手に入ったもので、それによって生活し生計を立てていた。ところがふとしたことから、作物とそれを取巻く昆虫の相互関係について考えたり、昆虫学についての漠然とした説明を聞いたりするようなことが起ったので昆虫にひどく興味を感じるようになった。そしてカボチャの花粉を媒介するマルハナバチが年によって多かたり少かたりする原因はどこにあるのか、そんなことを追求し観察し出すようになった。こうして島に咲くカボチャの花からマルハナバチの巣へ、マルハナバチの巣からそれを加害する野ねずみへ、野ねずみから猫へと観察の歩みを導いて行った結果、彼は遂に一際猫の勢力如何にあるのだとはっきり心得るようになった。彼はこの発見を喜んでそれから前のように肥料のやり具合を加減したり、薬剤を散布したりする代りに猫の研究にとりかかり、人々の注意も聞き入れないようになってしまつて、その日の暮しにも囚まるようになったのは勿論である。

話はこれでおしまひである。この場合Sさんは百姓でなくてもよく、学生であつても何であつてもよいのである。百姓には百姓の、学生には学生の務むべき事柄が沢山ある。余暇の利用として、趣味として、或は将来の導向役を目指して昆虫を集めたり、研究したりするのは良いことである。たゞ、Sさんのように本妻の務めをおこたつてまで熱中するようなことは薦めものである。我々は自分が現在なしている事柄の目的が何であるかを見失わないようにしたい。

田河 鳴蛙



スズバチに平行寄生^{es}
オオセイボウと
ヒメバチ科一種につて

1952年3月12日清音村黒田において、民家の土垣にくっついていた高さ3cm直径6.5cm程の土でほぼ円に近い蜂の巣を採って中を調べた所、巣は4室に分れていて第1室は隋円形のす位へ茶色と白の二重の幕をばって、その内に黄色のオオセイボウ幼虫1がいた。第2室には蜂の幼虫はいなくアリと蟻の幼虫の死がい各1個体あったのみ、第3室は1室と同じく黄色のオオセイボウ1がいた。第4室目は前の3つの室とちがって茶色の薄幕なく白幕のみの中に体はミルリ色で突起の大きいヒメバチ科1種がいた。これら4室中



オオセイボウ
体長 17mm
中 6mm



ヒメバチ科1種
体長 15mm
中 6mm

には各々幼虫のフングが沢山あったとしてスズバチは寄生されてしまつて一匹も残ってゐなかつた。又幼虫3匹中2匹が大オオセイボウで

1匹がヒメバチ科1種であつたが成虫になる内に各々1匹づつ残つたとして前者は27.5.13.蛹化し同6.6羽化、後者は27.4.26.蛹化し同5.13.羽化したものでこの種名は確かな事がわからないので後日報告する又このスズバチは成虫として得られなかつたので種々の方面から筆者が推定したものである。

(近藤 光宏)

伯耆大山のベニモンカメムシ

Elasmostethus humeralis

JAKOVLEVは体長11mm内外で青緑色に紅褐色を交へた可愛らしいカメムシでやはり山地性らしく、本年7月12日大山の横手道で Beating-net に入つてまた1個体を採集した。(小野 洋)

ヒメチャルネアオカメムシ
倉敷で再記録

本年7月17日夜、拙宅(旭町)2階で読書の最中、本種 *Plautia splendens* DISTANT と思われものが窓外より電燈に飛来した。本種は先に白神 昭君が1950年8月31日鶴形山の自宅でやはり燈火に飛来した3個体を記録されておるので倉敷ではこれを4個体が採れたことになる。かなり稀種

であるらしいが、倉敷では局部的
(鶴形山附近)には少くないのかも
しれない。 (小野 洋)

◇ ニラの花とヒメアカタテハ

秋もたけなわな頃9月初旬から
中旬にかけて見渡す倉敷平野に点
々と白く浮き出て一そこには白い
ニラの花畑が強烈な匂にひかれた
虫達を集めて平和な蝶や蜂の天国
を現出させています。倉敷附近で
はあまり数が多くないが秋季その
発生の顕著なヒメアカタテハの美
姿がその花上に見られます。ヒメ
アカタテハのオレンジとニラの白
色とが調和して幻想的な雰囲気
を醸し出すこの季節です。又数知
れぬ多数のイチモンシセリやオ
オチャバネセリ っています
す。又夏を越したミドリヒョウモ
ンメスクロヒョウモン等のArgynnis
群が好んでその花上に憩い、それ
に混じてベニシジミ、モンキチョ
ウ、モンシロチョウ等の清楚な姿に
接し秋の田園を少し散歩すれば出
会うこの風影は秋の風物詩の一つ
でありましょう。 — 蝶訪花抄(1) —

◆ カミキリ 2, 3 題 ◆

・トラフカミキリ — 本誌別冊鶴形
山の昆虫では本種は倉敷あたりで

鶴形山のみ見られるそうだが、最
近都窪郡清音村に割合多産するこ
とがわかった。最初清音村の友達
が2頭採って来てくれたので、そ
の後案内してもらって行って見る
と、上部の刈り取られた桑畑があ
る。そこだと云うのでさがして見
ると、4頭採れた。充分さがせば
まだ採れたことと思うがふまがな
かったのでそれを掃った。この桑
は最近刈られたものだそうで、そ
れ以前は、まだ刈山いたと云う。
後日もう2個体採れている。場所
は伯備線清駅より北方約300m。

・アオスジカミキリ — 7月16日
総社町本町のスズラン畑に飛来
したも1頭採集。

・イタアカミキリ — 6月25日、
池田村豪溪に行った時、ゴマワ
カミキリと一諸にかん木にいたも
のを1頭採集。

・ヨリスジハナカミキリ — 同日豪
溪でノイチゴの花上で交尾中採集。

・ゴマフカミキリ — 5月7日、総社
町総社面中学校校前を歩行中のも
のを採集。

・ルリカミキリ — 珍らしくないが
総社町門田と山手村福山を産地と
して知る (水野 弘造)

キバウヘツカサムシ 那岐山に発生

本年8月1日那岐山に採集を試みたが、豊沢から菩提寺に至る途中、路傍のニシキギ科の一種と思われるものに本種 *Plinactus*

bicoloripes THUNBERG の著しい群棲を見、採集したので報告しておく。(小野 洋)

ワチアトカサムシ 那岐山で採集

本年8月2日、那岐山の岡山県側からの登山路で本種 *Picromerus lewisii* SCOTT を採集した。あまり珍しい記録ではないが一応報告しておく。(小野 洋)

エノツツノカサムシ 那岐山で記録

本年8月2日、那岐山へ採集を試みた際、登山路で *Acanthosoma expansum* HORVATH とと思われるものを採集した。本種は北海道・本州・四国・九州の山地に産するが稀な種である。標本は筆者保存。(小野 洋)

1952 年初巻のモンシロ

チョウ の発生小録

本年度のモンシロチョウの発生について少しく記録が集まりましたのでその状況を記してみたい。まず本年の発生記録は次の如くである。

初見日	場所	頭数	発見者
9/皿	治世村黒田	(?)	尾崎山畑
	総社町田町	(1)	流本
13/皿	倉敷市住吉町(1)		近藤
15/皿	倉敷市北浜町(1)		青野
	倉敷市住吉町(2)		近藤中塚
	岡山市三野	(?)	船越(註10)
16/皿	倉敷市北浜町(5)		広瀬
17/皿	総社町門田	(1)	水野

これでわかる通り本年は発生前の気候の寒冷さが影響したためか例年に比しておくれている(例年の記録は本誌 Vol. 1 No. 3 青野孝昭氏の文を参照されたい) 大体平年に於ける発生は2月下旬～3月上旬で標準初発は10/皿 或いは5/皿

附近であるが本年は初見が9/皿 或いはそれから少しとたえて15/皿 が標準初発日となって居り(この表や他の資料よりの私の推定であって御意見があるまたは至急御教示願いたい) 約一週間内外のおくれをみせている様である。16/皿 以後は記録が少ないが発生は顕著であった様である

終りに資料御提供の青野、近藤、水野、尾崎等の諸氏に厚く御礼申し上げます。(広瀬 義躬)

以下 9 頁に続く →



南方紀行 (2)

黒田 祐一

2月14日 (木)

ふと目を覺すと2月3日以来絶え間なく響いてゐたエンジンがぴたりと止んでゐる。物音一つしない、もう着いたのかと明りを燈してみると4時20分、未だ暗い海に2隻の船が遠く浮んでゐた。再びベットに入る。

7時頃オートバイの警笛に似た音に夢を破られる。水先案内(パイロット)が乗つて来たランチだろうか袖を捲ったワイシャツに長ズボンを穿いた色の黒いマライ人が8人許り乗つてゐた。

船はシンガポールの西南にあるブコム島の東に投錨してゐる。その島でこれから油を補給するのだ。右舷に小さい島があちこちに見え、左舷には一万噸級の船が遠く並ぶ数はしつてゐる。

朝食中に再び船は動き出す、セイラーが船艙の蓋の上から、7人腰をおろして移り行く景色を眺めてゐる、水深が浅くなつて来たせいか海の水が濁つてゐる様だ、昨日はそれでも藍色を帯びてゐたが今は青色をしてゐる、椰子の生えた島が目の前を廻り舞台の様に動いて行く

誰の住居かあちこちの白壁が木向かくれに目にしみる、島影では両方に長い櫓のついたカヌーに似た数杯の舟に2人づつ半裸の魚夫が乗り込み網を上げてゐる、何れも艦に鮮かにペンキで塗られた最新型のモーターがつけられてゐるのが目をひく、船の近くで臭い音を立ててはねる、「ハロー」とセイラーが魚夫に声をかける。熱帯に於ける朝の海は平和そのものである。

9時前船は再び停る、左舷に近く銀色に輝く油タンクの並んだ小さな島が一つ、ブコム島である、数隻の船が横づけになつてゐる。向も

なく一度の船が島を照れる、それと入れ廻りに船は動き始める、島に近づくと油タンクに画かれた Shell 会社の Shell とゆう文字が目に入る、赤・青・黄に塗られたドラム罐が海岸近くに何万となく重ね上げであるのに驚く、桟橋には油に汚れたランニング、半パンツ姿裸足のマライ人人夫がのろのろと働いている、船首と船尾よりロープが投げられウインチの音とともにまたく同に船はぴたりと横づけになる、見なれぬタテル蝶・シロ蝶・トンボが船の上をすばやく翔び過ぎる、高いのでうらめし気に見送るより外けない、直径30cmもあるパイプが船につながれ、桟橋の上を何本もはしつてゐる油送管の一本の栓が開かれる、カーキ色の帽子・制服をつけたマライ人の警官が一人行ったり来たりして船員が煙草を喫つてゐると見上げて注意してゐる、あちこちで働いてゐる人夫を見てみるとその中に大部中国人しかも女性が混じつてゐる、立札には喫煙を禁止する旨が英語と漢文で書かれ今更ながら南方に於ける中国人の力に驚く。

晝食後も網を手に甲板の上を採集して歩き蜂を2種網にする。士官だけかシンガポールに上陸出来るかもしれぬと云つてみたが補油が順調に行き時向がない爲に不可能となる。

2時前サード・エンヂニアがタンクまで補油量を調べに行くといつて一諸について行く事にする、網を片手に殺虫管をポケットにジャコップ(縄梯子)を伝つて下船、内地を出てより12日に生れて始めての外国の土地に足をおろす、何となく一歩々々が意義が有る様に思はれるのも面白い、一人の男に案内されてタンクの向を進む、周囲2里もない島全体が工場になつてゐて中央にある丘の向うに大天の住宅があるとか、丘には3軒の瀟洒な建物が正衣に、まかれてたつてゐる、道の傍に生えた雑草をスイピンかして歩く、ヨコバイ・蟻が入ってくる、2人タンクの一つに登つてゐる向その附近に生えてゐた一本の木をあさつてカメムシを一種網にする、帰途につく頃より小雨がぼろぼろしだす、上陸15分間、「ドリマー、どうだった」とキャブ



テンの戸に迎えられて帰船、向もなく解纜、沖で後から追って来たウォーター・ポートより2時間程給水されていよいよカーの目的地である東パキスタンに向う。

夕食後甲板に出て煙草をふかす、海はあくまで穏かである、或る所ではスコールであろう真黒い空から灰色の幕がたれ、こちらでは明るい空に雄大な入道雲が夕日に輝き、それを背景に帆船が二杯はしって行く、陸では見られぬ壮大な景色に暗くなるまで見とれる。

2月15日(金)

船の方向がシンカホールを界として変わったので日光が船尾の方のポールドから射し込む、一度はまったが最後、外見平穏だが潮の流れが早い為に助からぬので船員の間で死の海峡として恐れられてあるマラツカ海峡は今日も波もなく、風もなく、暑い。赤道を次第に離れてみるとゆうのに暑さを増して来る様だ。右舷にマライ半島が長く霞み時々船がすれ違ふ。

晝食の時食卓の上をばってみた青藍色のカッコウを一頭捕える、マコム島に停泊中飛んで来てみたものかもしれない。

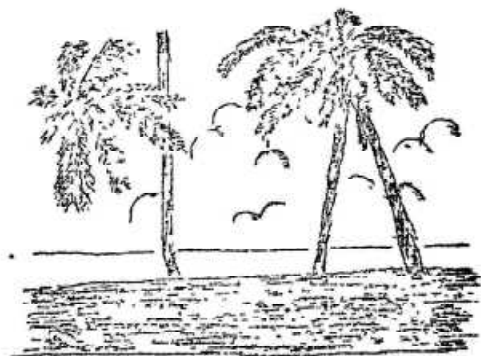
裸になって廻転椅子に長く伸びて読書、眠気を催すとベットにもぐり込む。壁にとりつけられたファンは一日中うなっている。

2月16日(土)

夕食後サロンで話してある所へ無線の局長さんが日本のコノマチヨウに似たヒカケチヨウを一羽もって来てくれる。

2月18日(月)

マラツカ海峡を過ぎてからは朝夕めっきり涼しくなる、今夜は右



舷の方向に遠くビルマの燈台の光が満天の星の下で輝いてゐた。

2月19日(火)

晝間の室温が今日は27°C。いよいよ明日は東パキスタンに着くの、夕食前渺々たる海と空を眺めながら甲板でゴツリ長に散髪してもらう、海風の爲ゴツリ長全身髪だらけになるので髪の番であるがこんな雄大な散髪は始めてだ。

2月20日(水)

陸が近いのかヒカゲチョウが一羽甲板の上をひらひらと翔び、蛾がはたはたと機械の裏に隠れ、甲虫が一桌の光を見せながらとび過ぎる、天気はいゝ。

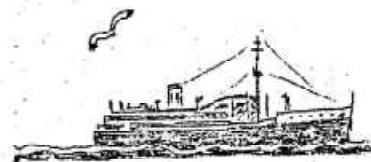
晝過ぎ無線室に遊びに行く、入港が近いのでレコードを次々とかけながら二席さんがせっせとボールドの真鍮の縁を磨いてゐた、3時を示した時計に並んだ日本標準時計は早6時を指してゐる。

5時前夕食のドラ、サロンの方へ行くと船首の方向に船が8隻少々見える、向くとカルナフリ河口に皆停泊してゐるとか、河口とゆうのに陸地が見えぬ。海水はすっかり濁つて来てゐる。

夕食後管ヒテツチに立つて外を眺める、水深は浅いらしくスクリューの廻転で泥水がむくむくと浮んでくる、5時35分エンヂンの音はたりと止む、太陽は水平線近く橙色に輝いてゐる、鷗が飛び、見なれぬ水鳥が甲板の上に姿を見せる。

室で三角紙を拵つてゐる所へ毎夜サロンで飲む紅茶をボーイが運んで来る、何時裁関吏が来るかもしれぬのでキャプテン・パーサーなどサロンで待たしてゐるとか。

8時過ぎワッチ(不寝番)に立つてゐるO君と一緒に電燈をあけて赤く、蛾・蠅・蜂・カナムシ・テントウムシなどが来てゐた、内地だったら取らぬ種類のものまで次々と殺虫管の中に入れてほうり込む、15種程採集して引上げる。(続)



→ (4頁から続)

1952年 春季のアケハ

チョウの発生記録

先に本同好会では蛭の初発日の調査を決定し現在も続行中であるがその一部として本種の初見の記録が集つまったのとそれに私が気をつけて記録しておいたものを加えて当地での昆虫季節調査の参考としてに発表する次第である。

初見日	場所	頭数	発見者
26/Ⅳ	岡山市津島	(1)	小野洋
4/Ⅳ	倉敷市鷺形山	(1)	尾崎山燭
5/Ⅳ	倉敷市羽島山	(1)	〃
6/Ⅳ	総社町門田	(1)	歌村
9/Ⅳ	岡山市津島	(2)	小野洋、野野
12/Ⅳ	岡山市網浜	(1)	広瀬正
16/Ⅳ	岡山市門田	(1)	広瀬正
17/Ⅳ	岡山市門田屋敷	(1)	広瀬正
	岡山市上石井	(1)	〃
19/Ⅳ	岡山市門田	(1)	〃

以上の記録から見て標準初発日は16/Ⅳとするのが妥当であると信ずる。なお22/Ⅳにはかなりの発生を見た。それ以後は連日その発生は上昇の一途をたどった。本年は3月以前がかなり寒冷であってモンシロチョウの発生なども例年(※)に比しておくたようだが本種はその発生がモンシロチョウに比しておよいためその影響は少くまず平年並の発生といえよう。終りに御協力下さった各位に深謝の意を表す。
*例年に於ける本種の発生は本誌Vol.2 No.5の筆者の拙稿を参照されたい。

注. 標発についてはその附近の記録があまり集まらないのでこれから判断することは軽率かも知れないが一応16/Ⅳとしておく大方の御叱正を乞う。 (広瀬正 謹記)



会 報

小野 洋

本会発足以来約一ヶ年半、小生非常に不手際ながら「すまじ」を皆様の手元にお届けすること(発行)とそれの管理の方の任事を務めてまいりましたが、今回(他の多くの会の一般的役員任期から見ても)既に交替の時期に立至ったと考えられますので、ごなたか適当な方にパトンをお渡ししたいと思います。御承知の如く本会会則には役員任期なるものは定められておらないので、現在のところ在任中の役員が適当にこれを判断して差支えないものと考え

ますし、又本会の役員として現在までに定められている役員は一月に発行されました役員一覧表にもありません。代表者を除いて編集、会計、連絡の3つであり、発行管理と云う位事は別働の役員として正式には認められておりませんので、現在のところ便宜上、公認されたところの編集係(5名)がそれぞれの中で適宜この仕事を行う人を定め、交替を行なうて行っても差支えないと考えられるのであります。このことは会則第7條にも全く反することはありません。

以上の解釈からすれば編集係の内で直ちにこれを處理してしまつて然るべきでありますが一応皆様にお知らせしたいと思ひます。現編集者内では青野孝昭氏を替す声が高いのであります。

本会ではあくまで物事を民主的に選出することをモットーとしてゐることからしても、この様なことは特に合法的に行ふべきであります。近々懇談会が開かれる模様もありませんので、会員皆様の以上の考え方に対する御意見と同時に、これに反対のお方は拙宅までなんらかの方法で9月末日までに御通知下さいませお願いいたします。お知らせなき場合はこれに賛成されたものと認め、總會員の三分の二以上の賛成で、以上の解釈が承認されたものとし、編集者側では青野孝昭氏にこの仕事の交替をお願いすることになります。

編集後記

編集の都合でおとしぶみ2・3次号に廻ります、御了承下さい。(記事の古いのからのせませた。)田河照蛙氏には御忙しいところを御無理を云つて書いていたゞきました感謝します。本年は早100頁を突破し増大盛んな様です。(編集者)

すずむし 外2巻才9号

昭和27年9月22日 印刷

昭和27年9月24日 発行

編集者 友野 良一

印刷者 友野 良一

発行所 倉敷市船川町
本設石小學校管理科教室内
處: 改良生同好会